

# 文学論

## 映画文学人生論

夏目漱石 (1867-1916)

『文学論』(1907) 「大倉書店」 「服部書店」

『文学評論』(1909) 「春陽堂」

『現代日本の開化』(1911) [朝日講演集]

『私の個人主義』(1914) 「輔仁会雑誌」

漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底  
同定義の下に一括し得べからず

夏目漱石がイギリスに留学して痛感したことの  
一つは、「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは  
到底 同定義の下に一括し得べからざる異種類の  
ものたらざるべからず」である。

漱石は漢学に所謂文学を知っていた。「余は少  
時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも  
関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然  
と冥々裏に左国史漢より得たり」。

英語に所謂文学はイギリスに留学して学んだ。  
到底同定義の下に一括し得べからざる異種類の両  
者を比較して、独自の文学論をうちたてようとし  
た。その文学論は、失敗の亡骸（なきがら）、奇  
形児の亡骸、あるいは立派に建設されないうちに  
地震で倒された未成市街の廃墟のようなものでは  
あるが、黒船来航以来の外発的開化をなるべく排  
除し、自己本位の立場から内発的開化を心がげて  
達成した一つの成果である。

とはいえ、「文学とは何か」は、『文学論』を  
読んでもわからない。文学の大目的は何か。その  
疑問への解答も『文学論』には示されていない。  
そう簡単にわかってたまるか、と漱石は内心で  
思っていたかもしれない。しかし、疑問を解明す  
るヒントはいくつか残してくれた。

まず第一のヒントは、「凡（およ）そ文学的内  
容の形式は（F+f）なることを要す」。



# 文学論

映画文学人生論

文学的内容の形式？ (F + f)？ Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は観念の二方面即ち認識的要素 (F)と情緒的要素 (f)との結合を示したるものといひ得べし。何のこつちや、と言いたくなるが、要するに、情緒的要素に注目している。

次に、第二のヒント。「文学の大目的の那邊に存するかは暫く措 (お)く。その大目的を生ずるに必要な第二の目的は幻惑の二字に帰着す」。

さらに、第三のヒント。「凡そ文学者の重 (おもん)ずべきは文芸上の真にして科学上の真にあらず。かるが故に必要な場合に臨みて文学者が科学上の真に背馳 (はいち)するは毫 (ごう)も怪しむに足らざるなり。」

第二のヒントと第三のヒントからは、少なくとも文学の第二の目的が幻惑であり、それは科学上の真ではないことがわかる。文芸上の真にして科学上の真に背 (そむ)くものには、(一)誇大法、(二)省略、選択法、(三)組み合わせ (詩人、画家等の想像的作物) などの特徴がある。

つまり、科学者たちがつて、文学者は誇大法や省略法で読者を幻惑する傾向がある。読者が幻惑されたくないと思えば、あらかじめそのような文学者の手口を知っておいたほうがよい。

無人島の天子とならば涼しかる 漱石